

西夏文字における「点」の出現環境と機能

【憑論論文】

荒川 慎太郎

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

【要旨】 本稿では、西夏文字の「点」はどの位置に、何のために付加されるのかを考察した。本稿の議論に関係する、西夏文字の構造、筆画について術語とともに述べたのち、考察対象となる筆画「点」を定義づけた。筆者は、西夏文字全字形を網羅的に掲載する発音字典『同音』により、点を持つ西夏文字の原文を調査した。結果、西夏文字の「点」について、字形全体ではなく、要素部品の右に付され、文字要素を構成するものと分かった。また点の出現環境を精査すると、点が付される要素部品は、「A 類：くノ型を持つ」と「B 類：七型を持つ」に二分されることが分かった。A, B 類ともに類似する要素部品（ノメ、ヒ）がある。点の機能は、西夏文字創製時には、類似する部分（ノメとくノ、ヒとヒ）の差異を際立たせる「強調符号」だったが、後に点の有無のみが弁別要素と誤認されることになったと筆者は推測する*。

キーワード：文字学, 西夏文字, 文字要素, 筆画, 点

1. 西夏文字と資料

1.1. 西夏語と西夏文字

本考察は西夏文字の字形・筆画に関するものである。西夏文字はその成立過程、資料、文字の構成と字形など、やや特殊なものであるため、考察に関係する要点を述べておく。

西夏文字（概要は西田 2001 参照）は、チベット・ビルマ語派に属した死言語、西夏語（概要は Gong 2003, 西田 1989, 2012 など参照）の表記のために創製された文字である。皇帝の命によって当時の学者が短い期間に考案し、1036 年に一度に公布された点が、長い年月を経て整理された漢字と異なる。西夏国（11～13 世紀）滅亡後も、西夏語とともにしばらく存続したものの、使用者は絶え、20 世紀初頭に解読されるまでその姿が判明しなかった。

* 本論文は、日本言語学会第 161 回大会（2020 年 11 月 21 日, Zoom）における筆者の報告「西夏文字における「点」の出現環境と機能」の内容を大幅に改めたものである。発表の際に有益なご意見を頂いた先生方、ならびに『言語研究』査読者に深くお礼申し上げる。また本稿のため、既存ではない西夏文字フォント（AraTangut Ver. 1.003）を短時間で作成してくださった、Willow Type Foundry の書体デザイナー大澤海斗氏、英国レディング大学博士課程（書体デザイン）Yang Xicheng 氏の尽力にも厚く御礼申し上げます。なお本研究は、科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）挑戦的研究（萌芽）「アジアの文字研究を対象とした、「字形」研究基盤の構築」（課題代表者：荒川慎太郎、課題番号：19K21628）、及び東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同利用・共同研究課題「アジア文字研究基盤の構築（2）—文字学に関する既存術語の再検討」の成果の一部である。

西夏文字資料には、西夏語・漢語対音資料、チベット文字の音注資料などの他に、漢語音韻学に倣った西夏語音韻学に基づく各種の韻書・韻図が現存する。このため、西夏文字の形音義が高い精度で再構成できる。

概略を述べれば、西夏文字は、機能的には漢字に近く、1文字 = 1音節 = 1語（あるいは1形態素）という「表語・表音節文字」である。

(1) 𐽀² dzwo: 「人」¹

ただし、形状的には語（が実詞である場合はその形）と字形の結びつきの恣意性が高く、象形性も認められない。約6000字のうち、漢字と共通する字形もほぼ無く、基本的な筆画と「部首法」のみが漢字に倣ったものと言える。

1.2. 西夏時代の字書

本考察では、西夏文字の原文資料として『同音』と称される発音辞典を使用する²。西夏文字の字形研究にとって、漢語の切韻系韻書に類する（形音義それぞれの解説を有する³）『文海』と称される韻書が有用であることは論を待たないが、現存する刊本は平声という声調の部分のみという、量的な制約がある。なお、漢字の『説文解字』のような「部首で整理した字書」は現在まで発見されていない。『同音』は同じ発音の文字を羅列するもので、字形解説は持たないものの、旧版・新版と見做される甲種本・乙種本がほぼ完全に残り、体系的に西夏文字を通覧できる資料と言える。同書は字形分析こそしていないとはいえ、極めて微細な筆画まで表わしているので、一種の字形規範としても認識されていたと考えられる。

一方で、『同音』は刊本であるから、誤記、誤刻、印字の擦れ、逆に本来空白のある個所に墨が溜まる、などに注意を払って扱わなければならない。

本考察では『同音』の「見出し字」（大字）を原文⁴の根拠とする。新版の例として乙種本に欠損する場合、丁種本などで補う。文字の例では、西夏文字を示すため、本稿のために特別に作成したAraTangutフォント、既存のフォント（今昔文字鏡西夏文字フォントなどをやや批判的に提示する）、スキャンした原文図版も掲載する。内容を鑑み、あえてノイズ除去などの修正は行っていない。

¹ 以降、西夏文字の推定音も示す場合は荒川（2014）に基づく。上付き数字の1は「平声」、2は「上声」という声調を表わす。西夏文字には適宜『夏漢字典』のコード番号も付す。

² 『同音』『文海』の構成、文字配列については荒川（2014: 70-76）参照。一般に「甲種本」が「旧版」、「乙・丙・丁種本」が「新版」とされる。

³ 『文海』の文字分析・記載についての問題点は荒川（2022a: 92-93）参照。

⁴ 図版は俄羅斯科学院東方研究所聖彼得堡分所他編（1997）（以降、図録略称『黒水』7）より。同書の乙種本図版7～50葉目（『黒水』7: 31-53）は葉番号がずれてしまうため、注意を要する。以降『同音』記載箇所は、図録のページ数は省略し、西夏研究者に一般的な表記とする。「38A65」であれば「38葉目右頁6行目上から5文字目」を指す。乙種本に無く丁種本などから補った図版の場合は「05A71^J」のようにする。

1.3. 西夏文字の特徴と構造

本考察に関係する、西夏文字の特徴と構造を述べる。西夏文字1字形は、構成要素を分析していくつかの段階を示すことが可能であり、最終的に「一続きの筆画」(画数引きの字書では1画に相当する)まで分解できる。

西夏文字は視覚的におおよそ縦横に分析できる。例えば、𐵇「水」は「偏」𐵇と「それを除いた部分」𐵇に、「それを除いた部分」𐵇は「冠」𐵇と「その下の部分」𐵇に、「その下の部分」𐵇は左右の要素 干、𐵇に分析できる。

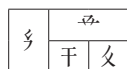


図1 「水」の字の分析 (□の中が後述の「文字要素」)

𐵇「水」に対して、𐵇「魚」という文字があり、右下の左右要素が交換されていることが確認できる。𐵇「人」は一見、「𐵇」「𐵇」「𐵇」の3部品に分析できるように見えるものの、𐵇「心」という、部品を左右交替させて成立する文字から、「𐵇」と「𐵇」の2要素であることが分かる。このような関係にある文字を「左右要素交替字」⁵と呼ぶ。

(2) 𐵇「水」vs 𐵇「魚」

(3) 𐵇「人」vs 𐵇「心」

全ての部品に関してでは無いものの、左右要素交替字から、どこまでが部品であるかが認定できる。この「他の要素と交替可能」なレベルの部品を「文字要素」と呼ぶ。

文字要素はその機能から、大きく「意符」「音符」「派生符」「機能の分からないもの(これは「現段階では不明」という要素と、おそらく(無機能ながら)字形のバランスなどのために付加される要素を含む)」に分けられる。意符と意符の組み合わせによる「会意文字」、意符と音符の組み合わせによる「形声文字」、音符と音符の組み合わせによる「会声文字」などがある。

(4) 会意文字の例 𐵇「心」(の旁) + 𐵇「無い」(の旁) = 𐵇「忘れる」

(5) 形声文字の例 𐵇「樹」(の冠) + 𐵇¹nya:「黒い」(の全て) = 𐵇¹nya: { 樹木名 }

(6) 会声文字の例 𐵇²bi: (の偏) + 𐵇¹o (の偏) = 𐵇¹bo { 仏典陀羅尼用音写字 }

上の会声文字の例のように、声母を表わす文字(反切上字)と韻母を表わす文字(反切下字)が合わさってできる字を「反切上下合成字」と呼び、声母を表わす部分を「声符」、韻母を表わす部分を「韻符」と呼び、1音節全てを表わす「音符」と区別する。

⁵ 西田 (2001: 5421) の「対称字形」(3) のパターンに相当する。ただし図像的な「左右対称」とは言い難いので、本稿では術語を変える。

この他、既存の字に特定の派生符が付加されて、派生字が構成されることがある。

(7) 𐵓² mir 「惑う」 → 𐵓² lha:q 「惑う」

上における「ユ」のような冠は意符でも音符でもなく、派生字専用の文字要素である⁶。

意符と音符は、漢字の類推で「〇〇部」のように、現代の研究者によって分類・整理される。西夏人自身の認識を示す資料は残らず、現代の研究者が同じ文字要素を持つ文字群から意味あるいは発音を手掛かりに推測している。研究者ごとに異なるもの、いまだに意味などを確定しがたいものも少なくない。現代の西夏文字索引は、検索の便のため、見出し部首と画数を手掛かりにする。漢字同様、全ての西夏文字は何らかの部首を持つよう定められている。ただしその見出し部首が派生符であったり、機能不明のものである場合も多い。

西夏文字の部首には、位置する場所（漢字の偏・旁・冠などに相当する）によって形状・筆画が変化する「可変部首」とでもいうべきものと、どのような位置でもそれらが変化しない「不変部首」がある。

(8) 可変部首の例 「水」偏（字形中央の場合も）・旁・冠

偏：𐵓「水」、𐵓「深い」、𐵓「血」 旁：𐵓「バター」 冠：𐵓「汚泥」

(9) 不変部首の例 「否定」偏・旁

偏：𐵓「無い」、𐵓「禿」 旁：𐵓「無い」、𐵓「静寂」

「部首」は偏旁などの「位置による部品名」で呼ばれることもある。

表1 可変部首の文字要素

文字要素	偏旁	部
𐵓	水偏	水部
𐵓	水旁	
𐵓	水冠	

漢字学の「偏・旁・冠・脚・構・繞・垂」に相当する、西夏文字要素の配置パターンはほぼ漢字と同一である⁷。「偏と旁の間にある要素」を呼ぶ適当な術語が無いため、本稿では暫定的にこれを「間」と呼ぶ。

西夏文字では漢字などと同様に、ある文字の全部あるいは一部から別の字が生み出され、さらにそこから新たな文字が作られることがある。西田（2001: 537r-538r）などでは「基本字」と「派生字」と呼ばれる。基本字は若干誤解を招く可能性があり、派生字だけでは一次派生、二次派生の別が分かりにくい。本稿では下のように厳密に呼び分けることにする。

⁶ この冠による派生についてと、他の例は荒川（2022a: 102-103）参照。

⁷ 具体例と特徴は荒川（2022a: 96-97）参照。

表2 西夏文字の派生とそれを表わす術語

術語	元(もと)字		(一次)派生字		二次派生字
例	𗵑	偏付加⇒	𗵑	冠付加⇒	𗵑
意味	「耳」		「聞く」		「聞く」

派生は、偏旁の追加の他に文字要素の交換による場合がある。また文字要素のレベルでも、筆画・部品の添加による派生⁸が確認できる。文字要素の部品を「要素部品」と呼ぶ。

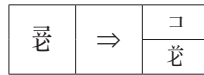


図2 文字要素とその分析(右の□の単位が要素部品)

西夏文字の字形⁹は「文字要素」の組み合わせから成る。本稿での定義をまとめておく。

字形：「1文字」に相当する。他の字と区別される文字の骨格となるもの。

文字要素：他の要素と交代可能な単位。形(実体)はあるものの意符・音符とは限らない。

要素部品：文字要素が分析できる場合の、構成部品。

部(部首)：配置位置によらず、意符・音符として働くもの。

偏旁(など)：部が文字のどこに位置するかで、呼称の変わるもの。

おおむね、上位概念から順に並べると次のようになる。

字形>偏旁>部(部首とも。意符・音符など)>文字要素>要素部品>筆画

1.4. 西夏文字の筆画

文字要素は「筆画」から成る。ただし2節でも述べるように、筆画は文字要素の最小の構成要素でありながら、体系的な整理が依然行われていない。西夏文字に対しては、漢字同様「四角号码」法による検索手段も考案されており、そこで「筆形」とされるものもあるが、これは左上・右上・左下・右下に位置する形状を示したものであり、2画以上のもも含まれるから、「筆画」とは見做せない。

筆者は2節の実見調査も踏まえ、本文中で言及しないものも含め、以下のような

⁸ 西田による文字要素の派生の説明と派生手順の分類は、西田(1966: 238-240)参照。なお、西田による「西夏文字要素表」は、西田(1961: 417)の段階では「傍の位置にのみたち得る文字要素」(本考察で扱う𗵑など)を含んでいたものの、その後西田(2001: 5391-r)などではそれらが省略されてしまい、「西田式部首検索の見出しとなる部首」とでもいうべきものが「西夏文字要素一覧」となっているため注意が必要である。

⁹ 本稿では「字体」ではなく「字形」と呼ぶ。「字体」が、中国の研究者に「書体」(楷書体・草書体など)のように扱われるためである。

「1画」を想定する。筆画は「屈曲の有無」で大別する。

表3 筆者による西夏文字の筆画と本稿での呼称

屈曲の有無	形	暫定的な定義	暫定的な呼称
屈曲しない	丶	線分として具現するものの、向きが弁別的でないもの	点
	丨	上から下に垂直に下ろされる線	縦線
	一	左から右に水平に引かれる線	横線
	丿	縦線の途中から左下への斜め払いとなる線	縦左払い
	ノ	右上から左下への斜め払いとなる線	左払い
	㇏	左上から右下への斜め払いとなる線	右払い
	㇏	左上から右下へやや時計回りにカーブする線	右覆い
	㇏	左下から右上へ跳ね上がる短い線	跳ね
屈曲する	└	横線の右端から垂直に線が下ろされるもの	折
	フ	横線の右端から左下に払いのようになるもの	鉤
	㇏	横線の右端から左下に払い、横線が連続するもの	Z型
	く	左払い終端から右払いに連続するもの	く型
	㇏	く型の終端から跳ねにつながるもの	左払い折跳ね
	ろ	縦長の「ろ」の終端が左上に跳ね上がるもの	ろ型
	ろ	Z型の終端から左下に払いのようになるもの	フフ型
	㇏	フフ型の鉤が一つ増えるもの	フフフ型
	し	Lの終端が上方向に跳ねるもの	L型
	し	短い横線の終端からL型となるもの	横線L型
ろ	ろ型の右側にのみ付される「ろ」のようなもの	湾	

なお、本稿では適宜、㇏ = ノノメ の4画 のように、西夏文字筆画に近似する片仮名・平仮名・漢数字など用いて分析・説明を行う。

2. 問題の所在と西夏文字の「点」

西夏文字の文字要素を成り立たせる「筆画」に関して、西夏人自身の認識を示す資料は残っておらず、漢字筆画からの類推で導き出されてきた。『夏漢字典』などの現代の字典類では、便宜上その筆画に基づく「画数引き・部首引き」の索引が一般的であり、広く利用されている。ただし既存の字典索引における字形・画数・筆画の中には、疑わしいものもある。

西夏文字の文字要素は、直線、曲線、そして点を組み合わせた筆画によって構成される。こうした基本的な筆画については、現用の文字索引でこそ活用されるものの、研究対象としては重要視されてこなかった。筆者は西夏文字の基礎に立ち戻り、筆画の一つとして点¹⁰を検討することにした。

¹⁰ 四角号碼法用に李編(2008:23)、韓編著(2021 vol.9:268)などに「筆形」が定められており、「点」とされるものがある。ただし字例(𐽄 𐽅 𐽆 𐽇)を見ると「短い縦線」や「右払い」も含まれており、「点」と認める範囲が広すぎるので、この考えは採用しない。

西夏文字の点には機能があるのか、あるいは文字要素の一部分に過ぎず、特定の機能は持たなかったのか、管見の限り専論は無い。また、如何なる条件、場所に点が現れるのかも、これまで議論されてこなかった。西夏文字の成り立ちから、西夏文字の点が漢字のそれのように「何かの象形に基づく」ことは考え難い。では共時的な弁別特性（例えば「A」と「A'」のように類似する字形の区別。漢字なら王と玉のような区別）を目的とするものであろうか。筆者は確認できる全ての西夏文字字形の点について調査することにした。

西夏文字の点についても、創製当時の認識を記した資料は現存しない。現代の研究者が、字形を確定する際に点と見なしてきた。しかし西夏文字原文を確認すると、筆者も含めこれまでの研究者が点として扱ってきたものを再考する必要がある。例えば、下の原文だと、偏の最終画の「点（丶）」と、旁の最終画の「点（？）」は明らかに字形が異なる。

図版1 点と「点と見做しがたい1画」の共起例



旧版『同音』37B12,



旧版『同音』51B32

これを現代の西夏字典類や西夏文字フォントでは 𐵓, 𐵔 のようにし、区別のない「点」として扱ってきた。前者に比べると、後者は平仮名の「か」の最終画のように、少し長さとかーブがあるように見える。「丶」と「ノ」（表3のように「湾」と呼ぶ）は形からも機能からも区別する必要がある。

本考察では次の5つについては「点」と見做さず、検討から除外することにした。

- 「ノ」のような筆画（湾）。
- 2つの点（または短い横線）が上下にあるように見えるもの。
- 2つの点（または短い線分）が左右にあるように見えるもの。
- 縦線の上にある点（または短い横線）。
- Z型の要素（+ 丶）の、底部中央に交差するように付されるもの。

それぞれ実例とともに説明する。

a. 「ノ」のような筆画は上記の図版のように、見比べると明らかに「点」より全体が長く、屈曲している。出現環境としては必ず「𐵓」のような2画の要素¹¹と共起し、右端つまり最終画に位置する。筆者はこの要素に関し、現時点では機能を明らかにしえないが、「𐵓」と組み合わせる「文字要素の一部」と考え、「点」とは見做さない。

b. 2つの点（または短い横線）が上下にあるように見えるものは、明確にその出現条件に限られる。

¹¹ 𐵓・𐵔・𐵕 など23例。

図版 2 2つの点（または短い横線）が上下にあるように見える例



新版『同音』07B68,



旧版『同音』03B18

上下に「ヽ、ヽ」と重なるような要素部品 ヽ は、くノ型（3節で扱う）が傍に位置するとき、その右横に付加されるものばかりである。この文字要素を持つ字形は、総数も10文字¹²と多くはない。少し紙幅を割くが、これらに言及しておく。西夏文字コード順に字形、推定音、意味を挙げれば次のようになる。

0694 𪛗²mI:「頬」, 0714 𪛗¹cyeu「払う, 牛」, 2642 𪛗¹pI:「辺, 境界」, 3835 𪛗²lheu「解脱」, 4319 𪛗²lo:n「辺, 際」, 4338 𪛗²mI:「メロン」, 4574 𪛗²mI:「他, 彼」, 4656 𪛗²thya: {反切上下合成字} [條]¹³, 4951 𪛗²lya:「辺, 界」, 5390 𪛗²phi「解く」

意味に限れば共通項は無いように見える。しかしこの10文字のうち、𪛗は𪛗からの派生（同音字）、𪛗と𪛗は𪛗からの派生（同義字）、𪛗²thya:は𪛗からの派生（反切上下合成字¹⁴）、𪛗は𪛗からの派生（類義字）である。つまり本来この文字要素 𪛗 を有した文字は、

𪛗²mI:「頬」、𪛗¹cyeu「払う」、𪛗¹pI:「辺」、𪛗²mI:「他」、𪛗²phi「解く」

の5文字に集約できる。それぞれ意味は異なるものの、韻母に-I:（荒川表記で中舌狭母音）ないし前舌狭母音などを持つ音節である。また、この文字要素は全て傍の位置に現れる。つまり、この文字要素 𪛗 は「韻符」(-I:部)として機能するものだったのではないだろうか。

例えば平仮名においては、「お」における1点と、「ば」における2点は、同じようなところに位置しながら、全く働きが異なる。同様に、筆者は一見2点にみえるこの要素部品を、本稿で扱う「1点」と別のものとして考える。

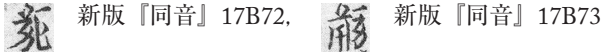
c. 2つの点（または短い線分）が左右にあるように見えるものは、片仮名の「ソ」のような向きで、何かの要素部品・文字要素の上方に位置する要素部品である。これらは書き手によっては、一続きのように連続して記されることもある。左筆画は「左上から右下への短い線」、右筆画は「右上から左下への短い線」と確認できるので、これらも考察から除外する。

¹² 『同音』で旧版から新版になって当該要素がくノヽ、型からくノ、型に改められた、つまり1点少ないものとして確認できる文字2690 𪛗²ko'「帆?」があり、これを除外する。ただし現行の辞典類の記載形、フォントの字形は「𪛗」であり「2点」と認識されている。

¹³ 音写用字の字形説明は{ }にジャンル（音写、反切上下合成字、草名、姓）、[]に近似する音の漢字（諸辞典に見られるものから代表的なものを一つ）を入れる。

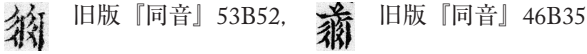
¹⁴ 𪛗¹thi:の偏 𪛗 を声符とするか。西夏語に無い音節表記などに使われる文字。旧版『同音』に無し。新版成立までに新しく作られた字形かと考えられる。

図版3 2つの点（または短い線分）が左右にあるように見える例



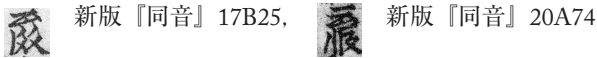
d. 縦線の上にある点（または短い横線）。芻のように必ず |（縦線）が共起し、それらの左側に共通する要素部品（彡）が存在する。これは原文を確認すると、点というより短い横線である¹⁵。これも本考察の対象から除外する。

図版4 短い横線とその下に縦線という例



e. Z型の要素（+、\）の、底部中央に交差するように付される点。ㄥのようになり、全体で要素部品となる¹⁶。これも共起する要素、位置が限定的なので、本稿では扱わない。

図版5 Z型（+、\）の底部中央に「交差する」点の例



幾何学における「点」は「大きさ、方向など、位置以外の特徴を持たない」ものであるが、西夏文字における「点」は、「筆画の中で最も短い線分として実体を持ち、方向はおおむね左上から右下であるものの、真横に近い向きであっても同一の線分と認識されるもの」と定義できよう。

3. 西夏文字の「点」の出現環境と、「点」が表わすもの

3.1. 原文の調査

西夏文字約6000字について、Кычанов et al. (2006)¹⁷、『夏漢字典』¹⁸、『西夏文詞典』¹⁹を用いて、点を持つ部首・構成要素を418字選定した。例えば次のような字形である。

¹⁵ 韓編著 (2021 vol. 9: 105) は「右偏旁索引」(旁から検索する索引)において、このT型部品を「2画」の見出しとし、その所属字を9字挙げる。しかしその全てが「彡」を左に持つ字形であり、「芻」(6画)を見出しとすべきかもしれない。

¹⁶ ㄥは西田 (1966: 242) の分類番号034の冠に相当し、「黄部」とされる。これに横線を加えた035の冠ㄥも存在するが、機能は定かではない。

¹⁷ Кычанов et al. (2006: 1-90) における文字索引は、文字の右端の部品から文字を検索する形式である。ただしその部品が、必ずしも旁には相当しないことは留意する必要がある。

¹⁸ 李編 (1997, 2008, 2013) のうち、増補修訂本である李編 (2008) を調査に使用した。

¹⁹ 韓編著 (2021) では西夏文字の通し番号、コード番号が無いので、個々の字形に言及する場合は丸数字で巻数、その後ページ数を記すことにする。

図版6 点が含まれる字形例



筆者は、『同音』新旧版からこの類の字形原文を調査した²⁰。

まず、「文字要素の右横部分」に点が位置することが確認できる。全ての原文から確認した結果、筆者は西夏文字の「点」について、「字形全体に付されるということではなく、文字要素のレベルに付される。単独では文字要素とならない。位置として左端に来ることはない。何かの文字要素と共に右側に付される」という特徴を指摘する。また点の出現環境を精査すると、点を含む文字要素は大きく次の2系統に分かれることがわかった。

A類 「くノ」のような筆画の要素部品（くノ型）²¹を持つ

B類 「七」のような要素部品を持つ

これらをおよそ画数順に、本稿での整理番号 A1, A2, …を付して分類した。形が同じと思われるものも、位置によって偏（L=Left part）→冠（T=Top part）→間（M=Middle part）→旁（R=Right part）で区別した。単独で1字形となるもの、冠の付加による 𐛁「板」（元字 𐛂「盾」に木冠）のような派生字は「偏」としてカウントする。

表4 A類（くノ型要素部品を持つ）の分類と例数（計237例）

タイプ	A1L	A1M	A1R	A2L	A2T	A2M	A2R	A3L	A3R	A4R
形	𐛁	𐛂	𐛃	𐛄	𐛅	𐛆	𐛇	𐛈	𐛉	𐛊
位置	偏	間	旁	偏	冠	間	旁	偏	旁	旁
例数	15	23	46	79	12	10	22	1	2	3

タイプ	A5L	A5R	A6R	A7L	A7R	A8L	A8M	A8R
形	𐛋	𐛌	𐛍	𐛎	𐛏	𐛐	𐛑	𐛒
位置	偏?	旁	旁	偏	旁	偏	間	旁
例数	2	1	1	2	2	3	1	12

²⁰ 2020年2月、ロシア、サンクト・ペテルブルグの東洋文献研究所において、同所に所蔵される各種『同音』から、対象となる字形を実見調査した。

²¹ 𐛁（3画）と 𐛂（2画）を論本文中で視覚的に弁別するのは難しいため、以降前者を「ノメ型」、後者を「くノ型」と呼称する。両者とも単独で文字要素となるほか、他の文字要素の一部となることもある。西夏文字にノメ型とくノ型の区別があることは荒川（2018）参照。そもそも Софронов（1968: II 278）では、くノ型自体はノメ型との弁別性は論じられなかったものの、筆画としては認識されていた。一方、現在の研究者にはあまり認められていない。ちなみに『夏漢字典』（李編2008）、ユニコード（Jerry 2022掲載のもの）では、ノメ型（3画）、ただし初画の左払いと右払いが接するような形で示され（前者は 𐛁、後者は 𐛂）、要素部品としては一つと認定される。それでも賈（2017: 33）、聶（2021: 39-40）のような、くノ型の再検討が行われている。

表5 B類（ヒ型要素部品を持つ）の分類と例数（計181例）

タイプ	B1L	B1R	B2R	B3R	B4R	B5R	B6R	B7R	B8R
形									
位置	偏(繞)	旁	旁	旁	旁	旁	旁	旁	旁
例数	1	13	1	6	11	4	60	3	9

タイプ	B9R	B10R	B11R
形			
位置	旁	旁	旁
例数	70	1	2

A類・B類ともに、「点を持たない」タイプの、字形の近似する文字要素も存在する。要素部品としてはくノ型に対してはノメ型、「ヒ」型に対しては「ヒ」型である。分析結果から、おおむね西夏文字の「点」の機能は、字形の近似する文字要素の違いを際立たせる「強調符号」と考えられる。より具体的には、くノ型とノメ型の区別、あるいはヒ型とヒ型の区別、を強調する機能があったと推定する。

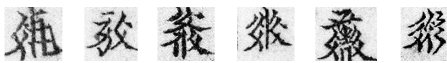
以降、A類とB類に分けて、点の出現条件と機能を検証する。結果的に、どちらも先行研究・字典類の文字要素の筆画・画数も再考することとなる。

基本的に文字要素ごとに、点の出現位置における形状を原文で検証する。類似する文字要素がある場合にはこれも例を挙げて比較する。本考察は字形を考察することが主目的であるものの、文字要素が如何なる部として機能しているかも、私見を示す。

3.2. 「ノメ」と「くノ」の区別

A類はくノ型の右側に付加される。偏・冠・間・傍の位置に確認できる。

図版7 A類の文字群



以降、分類番号順に検証していく。

A1

A1は偏・間・傍の位置に確認できる²²。この文字要素は、既存の字書・先行研究では、「4画」とされている。また索引では「右上から左下への払い」から始まる要素と見做されているので、筆順こそ示されないものの「ノメ、」のように扱われてきたことが分かる。しかし原文を子細に確認すると、「右上から左下への払い」で1画が途切れず、「左上から右下への払い」が連続する、つまり「くノ、」のような「3画」のようにみえる。一方、「点を持たないくノ型」と、ノメ型の文字要素も存在する（後述）。

A1は偏（A1L）・間（A1M）・傍（A1R）の位置に現れ、特に傍（A1R）の例が多い。

以降、例を、一般的な『夏漢字典』西夏文字コード番号、西夏文字フォント（AraTangut及び文字鏡フォント。字形誤るものに□）、新旧『同音』原文（『黒水』7）と記載位置、字義、筆画分析（片仮名などによる）の順で示す。（10）は偏、（11）は間、（12）は傍の位置の例である。

文字番号	フォント	『同音』旧	『同音』新	字義	筆画
(10) 3226	嫏	19B55	20A64	輝く	くノ、
(11) 3241	糞	07B76	05A71 ^丁	屎、汚濁 ²³	くノ、
(12) 0731	教	50A13	50B14	散らす、撒く	くノ、

一次派生字、二次派生字においても、くノ型の筆画と点は保持される。ただし後述の意符としての機能は失われることが多い。（13）は元字、（14）は元字に傍が付加されたと考えられる一次派生字、（15）は（14）に冠が付された二次派生字の例である。

(13) 3786	錯	48A75	48B71	盾	くノ、
(14) 2472	熾	25B71	29B21	堅固	くノ、
(15) 1365	熾	36A44	36B74	堅い	くノ、

²² 爨¹lhyu「(花の)白」はA1の傍では無いものの、この傍 爨を持つ唯一の字形である。しかし、明らかに 教²lyu「散らす」の変形が音符となる派生字と考えられるため、A1に分類した。ちなみに図版でも右下がくノ型であることは確認できる。

3041 爨 51B77 52A63 ¹lhyu (花の)白 コーくノ、

²³ 2641 爨²miの右に彡「水旁」を加えた、形声字と考えられる。

一方、「くノ型でありながら点が付加されない」文字要素も一見少なからず散見される。

図版 8 くノ型でありながら点が付加されない偏を持つ文字群



しかしこれらの多くは、実はくノ型だけで文字要素となっているのではなく、「くノ型とその右（全体の中央部）までが文字要素」であると再分析すると、意符あるいは音符として機能していることが分かる。

- | | | | | | | | | |
|-----------|---|---|---|-------|---|-------|------|----------|
| (16) 3155 | 𐽳 | 𐽳 | 𐽳 | 13A27 | 𐽳 | 14A13 | 抱く | くノソフノメ |
| (17) 3156 | 𐽴 | 𐽴 | 𐽴 | 14B38 | 𐽴 | 15B36 | 抱く | くノソフノメ |
| (18) 2503 | 𐽵 | 𐽵 | 𐽵 | 24A26 | 𐽵 | 25A12 | 後ろ | くノ - = |
| (19) 2274 | 𐽶 | 𐽶 | 𐽶 | 40B72 | 𐽶 | 41A46 | 晩産する | くノ - = |

(16–17) の 2 例は「𐽳」の部分が意符「抱部」であり、(18–19) の 2 例は「𐽵」の部分が意符「(時間的な) 後部」であると考えられる²⁴。

それでも 8 例ほど、「くノ型でありながら点が付加されない」「中央までを文字要素ともみなせない」字形が確認できる。次の (20) のような例である。


- | | | | | | | | | |
|-----------|---|---|---|-------|---|-------|---|----|
| (20) 2744 | 𐽳 | 𐽳 | 𐽳 | 15A31 | 𐽳 | 16A15 | 腸 | くノ |
|-----------|---|---|---|-------|---|-------|---|----|

筆者にはこれらの例が説明できないため、「点がくノ型と必須の共起筆画」とは言い切れない。一方、ノメ型には点が付加される例は見いだせなかったので、やはり点とくノ型には強い相関があるとみなせる。

A1 は少なくない字形の要素となっているが、それらの字音は多様であり、A1 が音符となることは考え難い。意符としては暫定的に「広まる・拡げる」を表わす「拡部」と考える。A1 が中央の要素となる場合はほとんどが派生字であり、意符と









²⁴ 一方、「ノメ偏とその右（要素部品）」で 1 つの文字要素となっているとみなせる字形もある。3349 𐽳² ryeqr' 「方向」(𐽳 47B18, 𐽳 47B78), 2223 𐽳² ryeqr' 「縫う」(𐽳 47B23, 𐽳 48A26) の例では、「𐽳」が ryeqr' という音符 (ryeqr' 部) になっていると考えられる。現代の字典類で、画一的にノメ型偏とされてきた字形については今後、「どこまでが文字要素か」再検討する必要がある。

しての機能を確認できない。ただし時に「𠄎」という単位で文字要素となり、音符²dI: (dI: 部) として機能すると考えられる。(21-22) は意味が異なるものの、同一音節である。

- (21) 0804 𠄎   13B16  14A63 ²dI: ~した 干くノ、
- (22) 1769 𠄎   13B15  14A62 ²dI: 守護する 干くノ、

A2

A2 は羅 (1915: 5) の「西夏國書類編部目 (見出し用西夏部首一覧)」でも「5 画」に分類され、筆順は明記されないものの「ノノメ、」と分析されたとみなせる。この画数と筆画は現代でも多くの字典・索引類に踏襲されている。ただし原文を実見すると「ノくノ、」のように、2 画目の左払いが右払いに連続するように見える。筆者は A2 を、筆画は「ノくノ、」、画数は「4 画」と見做す。偏・冠・間 (派生字のため例は省略)・旁に位置する。

- (23) 2218 𠄎   51B32 欠損 芽苗²⁵ ノくノ、
- (24) 2585 𠄎   31A16  31B43 地震 ノくノ、
- (25) 2648 𠄎   03A37  04A36 土地 ノくノ、

この部首は偏・旁・冠²⁶のどこに位置しても筆画の変わらない不変部首と認定できる。

点はくノ型と共起し、それと類似するノメ型とは共起しない。以下のような明瞭な最小対も確認できる。

- (26) 2063 𠄎   29B15  30A53 積む ノノメ
- (27) 2068 𠄎   29B17  30A55 土地 ノくノ、

ただし、A1 同様、9 例ほど、「くノ型で点が付加されない」字形が確認できる。

- (28) 2460 𠄎   32A75  33A18 {音写}[司] ノくノ

²⁵ 土偏+穿旁で「(土を穿って出てくるので) 芽苗」。

²⁶ 西田 (1966: 242, 347) では「𠄎」という冠が「𠄎部」と見做されている。西田 (1966: 347) で挙げられる字形には「点が無いもの」と「点があるもの」が混在している。正しくは前者が「𠄎部」であり、後者が「土部」である。今昔文字鏡の西夏文字フォントでも、この A2 の冠は「𠄎」のようになっていて、修正が必要とされる。

しかし興味深いことに、韓③: 368 には「本来、点の無い」とされる 2460 𐵓 が複数の文献で、偏に点を加えた「𐵓」のように「誤記」とされるとして、28 例以上を報告している。この「誤り」は、「くノ型であれば点が必要」という、A2 型との錯誤が原因であり、誤りというより「規則の衝突」と考えると説明ができる。





A2 を筆者は先行研究²⁷ 同様「土部」と見なすものの、筆画・画数については異論を持つ。

A3

A3 はごく少数、偏に 1 例 (29)、旁に 2 例 (30) (31) しか確認できない。

- (29) 0683 𐵓  𐵓 43B33 𐵓 45A78 ¹hya { 音写 } [夏] コクノ、
- (30) 1081 𐵓  𐵓 45B58 𐵓 46A51 ¹hya 塞がった コクノ、
- (31) 3339 𐵓  𐵓 43B32 𐵓 45A77 ¹hya { 草名 } [夏] コクノ、

この文字要素は、紛らわしい文字要素の対、つまり「コクノ」「コノメ」を持つ。例えばこれらを偏に持つ字形には「旁も同一」という、非常に弁別の困難な最小対²⁸ も存在する。





- (32) 1734 𐵓 𐵓  15B45  16B26 莫れ (否定命令) コノメ
- (33) 1081 𐵓  𐵓 26A27  26B64 恭 コクノ

本来、上記 (32-33) の両者のような区別のために点が利用されるのが合理的に思えるものの、そうはなっていない。ただし、「コノメ、」のような文字要素は確認できないので、やはりくノ型と点の相関は認められるものと言えよう。

A3 を持つ文字は全て同一声調、同一音節の¹hya である。従って、A3 は¹hya の音符 (hya 部) と見做せる。

²⁷ 西田 (1961: 402) の「土類」など。

²⁸ これらは現代の研究者にも弁別が容易ではなく、「異音同字」として扱われる (聶 2021: 75-77 など)。その他にも次のような例が確認できる。

- 1317 𐵓 𐵓  19A21  19B37 拭く コノメ
- 1318 𐵓  𐵓 52A63  52B44 跳ぶ コクノ

A4

A4 もごく少数、旁に 3 例 (34-36) しか確認できない。既存の字典類では「ノメメ、」(5 画 + 1 点) のように解釈されているものの、筆者の観察では、左払いから右払いが連続、その下にさらに、左払いから右払いが連続する、つまり「くくノ、」(3 画 + 1 点) である。

(34) 2645 𠄎  𠄎 14A68 𠄎 15A56 ²da 本家 くくノ、

(35) 2646 𠄎  𠄎 14A71 𠄎 15A57 ²da{ 姓 }[達], くくノ、
年長

A4 には「ノメメ」(5 画) の他に、「くノメ」(4 画) のような紛らわしい文字要素がある。「A4 とくノメが旁に位置し、偏が同じ」という最小対が存在するので例を挙げる。

(36) 0738 𠄎  𠄎 14A72 𠄎 15A55 ²da 大 (- 城) くくノ、

(37) 1566 𠄎  𠄎 30A73 𠄎 31A35 縛る くノメ

点が付される位置は「く」の右払いに「く」の左払いが交わる上部であり、点はそちらの筆画を際立たせる機能を持つと考えられる。筆者の推論だが、西夏文字作成者はいったん「くノメ型筆画とくくノ型筆画が異なる」という最小対の字形を作った。しかし、区別が紛らわしい字形となったため、筆画の区別のため、点を付したのではないだろうか(現在の字典・フォントの字形は「くノメ型筆画とくくノ型筆画が異なる」ことが忘れ去られ、しかも「ノメメ型とノメメ、型の区別」として誤認識されている)。西夏文字の全ての点筆画の機能とは認められないものの、これは西夏文字の部首・筆画を考える上で重要かと思われる。旁の位置で対立する最小対がある場合の、弁別の変化を筆者は以下のように考える。

西夏文字創製時	現代 (の誤認識)
ノメメ vs くくノ	ノメメ ※2 つとも同字
くノメ vs くくノ、	ノメメ vs ノメメ、 ※点による弁別

A4 においては「ノメ、ノメ」のような要素は確認できないので、やはりくノ型と点が結びついていると言えよう。




A4 を持つ文字は全て同一声調、同一音節の ²da である。従って、A4 は ²da の音符 (da 部) と見做せる。

A5

A5 もごく少数、偏に 2 例 (38-39) (ただしどちらも冠を持ち、冠以下だけで独





立した字形となる例は見られない), 旁に 1 例 (40) しか確認できない。点が付加される, 上の部分はくノ型と見做せる。その下の部分がノメ型であるかくノ型であるか見極めるのが難しいが, 筆者はノメ型と判断する。

(38) 0069    48A44  56A58^{丙?} 29 依る くノ、ノメ

(39) 1163    55B52 欠損 依る くノ、ノメ

(40) 0703    32B74  33B16 隠す, 避ける くノ、ノメ

この文字要素は, 紛らわしい文字要素, つまり「くノノメ」を持つ。

(41) 2798    43A66  44A16 百 くノノメ



(41) のような例は多くないものの, 筆者には点の無い理由が説明できない。ただし, 「ノメ、ノメ」のような要素は確認できないので, やはりくノ型と点の相関は認められるものと言えよう。

事例は少ないものの, 意味の共通点から, 筆者は A5 を暫定的に「依部」とする。

A6 ~ 8

先行研究で「点あるいは短い横線」として扱われてきた文字がある。次の「𐽀 (𐽀ノくノ一)」のような筆画で構成される要素の最終画を「点」と見なすか, 「短い横線」と見なすかで異なるフォントが用意されてきた字形である。『同音』で見える限りでは「短い横線」のようである。当該の要素を含む西夏文字フォントと原文は次のようになる。

(42) 最終画で異体字とされる字形の対と原文の比較

5173  (最終画線扱い), 5232  (最終画点扱い)

vs 『同音』  旧 35B72,  新 36B31

しかし, この横線の出現個所に着目すると, 全て, 件のくノ型が横線の上に存在することがわかる。つまりたとえ横線であっても点と同様の出現条件, おそらくは機能も同様であることが推測される。短い横線を底部に持つ文字要素は, 「𐽀」のような構えの中に, ノくノ型筆画が入る, それに加え「𐽀」の上に何らかの要素部品

²⁹ 韓①: 24 による。史 (2002: 122) には, 鮮明では無いものの新版『同音』の 56 葉目断片の図版が掲載され, 当該の字形が確認できる。この断片は版心が漢数字であり, 『黒水』7: 55-57 の「丙種本」末尾の断片と考えられる。

が付くと限定できる。三種（A6-8）をそれぞれ検討する。

A6

A6は傍の位置に1例あるのみである。当該部分が「構」の中に入るため、字形が小さくなり、必然的に判別が困難となるが、筆者はくノ型と判断した。下に原文とともに示す。

(43) 1949 𠄎𠄎 𠄎 55A56 欠損 𠄎 黒 𠄎くノ-

(43)の字形は新版『同音』、『文海』で欠損部にある上、西夏語韻書以外の出現例が無く、字形の確認が難しい³⁰。紛らわしい要素は上の横線と、点の無い𠄎のような要素である。判断が難しい字形が多いものの、筆者の観察ではこちら(44)は構の内部が「ノノメ」のように見做せる。

(44) 1256 𠄎𠄎 𠄎 43A47 𠄎 43B65 巧婦 ノノメ

用例が少なく意符としても音符としても確定しがたいが、暫定的に「黒部」としておく。

A7

A7はごく少数、偏に2例、傍に2例しか確認できない。1例ずつ(45-46)挙げる。

(45) 0156 𠄎𠄎 𠄎 11B31 𠄎 12B27 抱く ノくノ-

(46) 2921 𠄎𠄎 𠄎 10A67 𠄎 11A68 抱く ノくノ-

この文字要素は、紛らわしい文字要素の対、つまり𠄎「コノノノメ」を持つ。判読が困難な場合が多いものの、(47)のような例から、筆者はこちらはノメ型と判断する。

(47) 2921 𠄎𠄎 𠄎 24A68 𠄎 25A53 尿を出す ノノメ³¹

上記に加え、𠄎「負担する」、𠄎「抱く」の例から、筆者はA7を「担部」とする。


³⁰ 韓①: 335によれば、わずかに『同義一類』という文献で、他の色彩語と併記されているので、「黒い」のような形容詞(色彩)が推定されている。







³¹ 旧版では分かりにくいものの、新版では「ノノメ」の「メ」が強調されるように示されており、くノ型ではないことが明らかにされる。

A8

A8は単体の他、偏・旁、繞の右上、構の下など、さまざまな場所(48-52)に位置する。ただし当該の「ノくノ」の要素部品は「構」の中に入り、構はさらに上部に大きめの要素部品(冠)を持つ。結果、「くノ」の部分が極めて小さくなってしまい、字形の確認が難しいが、筆者はくノ型と判断する。

- (48) 0002    47B64  48A55 濾過するもの ノくノ-
- (49) 0741    36B15  37A41 沸騰する ノくノ-
- (50) 5173    35B72  36B31 抜く、救う ノくノ-
- (51) 4742    35B73  36B35 絹 ノくノ-
- (52) 2062    42A52  42B71 {姓}[回] ノくノ-

筆者の観察では、当該の部分は「ノくノ」のように見える。ただし、 の上部に筆画の多い要素部品を持つ文字要素で、「底部に横線を持たない」ものについても、判断が難しい場合もあるものの、(53-54)のような例から筆者は「ノノメ」と判断する。

- (53) 0763    50B17  50B75 梁 ノノメ
- (54) 4778   欠損  38A46 七 ノノメ

A8を持つ字形は発音がさまざまであるので、音符とは考え難い。字義も共通する意味を定めがたいものの、筆者はA8を「過部」とする。

3.3. 「ヒ」と「匕」の区別

B類は、点がA類とは異なる要素部品に付加され、文字要素となる。要素部品は片仮名の「ヒ」のような部分が共通する。

図版9 B類の文字群



判読が難しい時もあるが、仔細に観察すれば、点が付く場合は「匕」のように「右上から左下への斜め払いが縦線と交差する」ことが分かる。一方、点が付かない場合、要素部品は「ヒ」のように、斜め払いが縦線を突き抜けることはない。

点は、「し、匕の派生(匕、𠂇、𠂈 など)、しと複数の横線(𠂉 など)」には付か

ないという共起制限もみられる。これは「しはもともと交差する筆画が無い」「しの右の『三』は縦線と交差しない（規則がある）」ためとも考えられる。

この「底部右端が跳ね上がる筆画」は、基本的に字形の右端にしか生じないため、B類は原則的に傍の位置に生じる（1例の例外については後述）。「ノノメ偏とノくノ、偏の最小対」のような例は見いだせなかったものの、例えば、


(55) 5878   08B63  09B21 枚、條 ノヒ、

(56) 2452   46B13  47A23 昔 ノヒ




のような例を見ると、(55)は左払いの「ノ」が縦線を突き出ており、(56)は突き出ていない³²ことが確認できる。

以下、A類同様、分類順に検証していく。

B1

B1は整理上「偏（繞）」1例、傍13例としたが、偏（繞）の例は「底部右端が跳ね上がる文字要素が偏の位置に来た場合、繞のように下部の線分が延長される」という、やや特殊な字形 ³³ (57) であり、基本的には (58) のように傍に位置する。



(57) 2307   26B73  27B25 破裂する ノヒ、


(58) 0485   32A25  32B44 フェルト ノヒ、

B1は先行研究や字書では、点との関係は示されないものの、「ヒ」の部分は左斜め払いが縦線と交わる字形と見做されている。一方、点が付かない文字要素も存在し、要素部品は「ヒ」のように、斜め払いが縦線を突き抜けることはない。

(59) 0486   07B15  08A53 馬蹄 ノヒ

B1について筆者は暫定的に「条部」という意符を想定する。(58)の「フェルト」であれば「否定」+「条」で「条の無い布＝フェルト」という会意文字である。

³² 管見の限り、西田による西夏文字分析において、この文字要素の「縦線を突き出る・突き出ない」は考慮された形跡はない。例えば西田(1984:121)では「馬」の字を文字要素に分析し、直筆の字では   のようにする。1, 3字目を比較すると、前者は突き出ておらず、後者は突き出ている。ちなみに漢字「化」の傍などに見られる「ヒ」という要素は、本邦の漢字としては突き出ない「化」、中国簡体字では突き出る「化」が一般的であるものの、どちらも突き出るか・出ないかで弁別される（別の字形と見なされる）ことはない。ただし甲骨文まで遡れば、出る方は化(化)、出ない方は??(比)であり(落合2019:5など)、『説文解字』でも異なる部として整理されていた。

³³ この字形は  の文字要素の「一部の左右要素の交替形」である。詳細は荒川(2022b:27)のLBa06の項目参照。

B2

B2は傍の位置に1例あるのみである。下に原文とともに示す。B1同様、斜め払いが縦線を突き出ている。

(60) 2529 𐵓𐵓 𐵓 07B64 𐵓 08B23 冠 ノノヒ、

B2には「ノノヒ」のような、紛らわしい要素は確認できない。

𐵓と同じ偏を持つ2527 𐵓 皇城（𐵓「Xする」+ 𐵓「聖なるもの」= 𐵓「皇城」）のような例から、𐵓の偏 𐵓は「覆う、囲む」と推定される。𐵓「冠」は「頭を囲む」ものであるから、その傍は「頭」を意味すると推定する。従って、A2は暫定的に「頭部」とする。

B3

B3は傍の位置に5例ある³⁴。(61-62)のように、やはり斜め払いが縦線を突き出ている。

(61) 2826 𐵓𐵓 𐵓 52A45 𐵓 52B25 太陽 一ヒ、

(62) 0863 𐵓𐵓 𐵓 44B45 𐵓 45A33³⁵ 月 一ヒ、

強いて紛らわしい文字要素を挙げれば 𐵓（一ヒ）のような傍である。これらは(63)のような原文を見る限り、件の箇所は突き出していない。

(63) 0680 𐵓𐵓 𐵓 40B75 𐵓 41A51 顛倒 一ヒ

B3は𐵓「太陽」、𐵓「月」と、おそらく太陽からの意味派生字 𐵓、𐵓「東方、旭日」などの傍となる。筆者は暫定的に意符「明部」と見做す。

B4

B4は傍の位置に11例ある。(64-65)のように、斜め払いが縦線を突き出ている。



(64) 2300 𐵓𐵓 𐵓 50A57 𐵓 50B46 引く 二ヒ、

(65) 2176 𐵓𐵓 𐵓 40A48 𐵓 40B28 結ぶ 二ヒ、

³⁴ 5918 𐵓² sI:「死」の傍は文字鏡フォント 𐵓 では 𐵓+、(一ヒ、)になっているものの、原文を見る限り 𐵓 (一ヒ、) のようである。

³⁵ 斜め払いの突き出しが無いように見えるものの、縦線と払い接する上付近に印面の擦れがあり、本来あった突き出しの印字が消えたものと考えられる。ちなみに直下の例 𐵓 (新版『同音』45A34)は突き出しが確認できる。

強いて紛らわしい字形を挙げれば 𠄎 (ニヒ) のような字形である。これらは (66) のような原文を見る限り、件の箇所は突き出していない。

(66) 0312 𠄎  𠄎 08B53  09B12 股 ニヒ

B4 は 𠄎「結ぶ」やそれからの意味派生字 𠄎「つなぐ」、𠄎「嫉妬 (悪偏+結)」から、筆者は暫定的に「結部」と見做す。

B5





B5 は傍の位置に 4 例ある。B4 の上に片仮名「フサ」を上下に配した要素部品が付加される。B4 と意味的な繋がりが確認できないので、別要素として整理する。斜め払いが縦線を突き出ている。(68) は (67) からの派生字であり、そちらでも突き抜けが確認できる。

(67) 5585 𠄎  27B75  28B15 打つ フサニヒ、
 (68) 1166 𠄎  31A18  31B47 揉む フサニヒ、


傍の位置に、特に紛らわしい字形は確認できない。B5 は 𠄎「打つ」やそれからの意味派生字 𠄎「揉む」から、筆者は暫定的に「触部」と見做す。

B6

B6 は傍の位置に 60 例ある。(69) など確認した例全て、斜め払いが縦線を突き出していた。

(69) 3576 𠄎  33A17  35B12 明らかな ソーヒ、
 (70) 1671 𠄎  13B32  14B13 赤 ソーヒ、

強いて紛らわしい字形を挙げれば 𠄎 (ソニヒ) のような字形である。これらは (71) のような原文を見る限り、件の箇所は突き出していない³⁶。

(71) 1672 𠄎  34B43  35A38 振じる、揉む ソニヒ

B6 は文字要素を含む字形が多い上に、意味も音も様々で、一義的な意符と定めがたいものの、筆者は暫定的に「耀部」と見做す。

³⁶ 既存のフォントの突き出しは誤りである。韓⑨: 166 では、この傍は RR231 「𠄎」部と「突き出した」形状としているにも関わらず、その傍を持つ 3 字形全て (𠄎, 𠄎, 𠄎) は「突き出していない」。韓編著 (2021) は西夏文字に関する最新の辞典であり、細部にわたって非常に細かく字形が監修されているものの、このような不統一も確認できる。

B7

B7は傍の位置に3例ある。B6の上に片仮名の「コ」のような要素部品が付加される。B6と意味的な繋がりが確認できず、別要素として整理する。斜め払いは縦線と交わる。

- (72) 3140 𐵑 𐵑 𐵑 48A32 𐵑 48B25³⁷ 歌う コニ七、
 (73) 3123 𐵒 𐵒 𐵒 46B12 𐵒 47A22 歌う コニ七、

傍の位置に、特に紛らわしい字形は確認できない。B7は𐵑、𐵒「歌う」、𐵓「歌」から、筆者は「歌部」と見做す。

B8

B8は傍の位置に9例ある。片仮名の「ラ」+「七、」というより「一ス」+「七」のような字形(𐵔)に作るフォントも多いものの、(74-5)のような原文を見ると「ラ」+「七、」のように、点は「七」近くに位置する。いずれも斜め払いが縦線を突き出ている。

- (74) 0187 𐵕 𐵕 𐵕 18B53 𐵕 19A73 老 ラ七、
 (75) 1917 𐵖 𐵖 𐵖 27B37 𐵖 28A53 古くなった ラ七、

傍の位置に、特に紛らわしい字形は確認できない。B7は𐵕「老」、𐵖「古くなった」に共通する意味から、筆者は「老部」と見做す。

B9

B9は傍の位置に70例ある。確認した例全て、斜め払いが縦線を突き出していた。

- (76) 2844 𐵗 𐵗 𐵗 46B55 𐵗 47A65 病 コ七、
 (77) 2823 𐵘 𐵘 𐵘 02B63 𐵘 03B62 生まれる³⁸ コ七、

この他、𐵙²dzi:q「塞ぐ」から𐵙²dzi:q「泣く」が派生した結果、中央部にB9が生じ、繞のような字形になっているケースがある。これについてはB11も参照されたい。

なお、紛らわしい字形は傍の位置に確認できない。

B9は文字要素を含む字形が多い上に、意味も音も様々で、一義的な意符と定めがたいものの、筆者は暫定的に「病部」と見做す。

³⁷ 今回のB類の調査中、明瞭に「払いが突き出ているのに点が無い」という例外である。甲種本は明らかに点を持つため、ここでは誤刻と考える。

³⁸ 否定偏+病旁=「(病にならないのを願って)生まれる」。

B10

B10は傍の位置に1例(78)あるのみである。下に原文とともに示す。新旧版ともやや確認しにくいものの、筆者は斜め払いが突き出していると判断する。

(78) 0438 𪗇𪗇 𪗇 50A14 𪗇 50A75 ²lyu 都案(官名) ニコヒ、

紛らわしい字形は傍の位置に確認できない。

𪗇²lyu「都案(官名)」は、同音節の𪗇²lyu「散らす、撒く」から派生した字形と考えられるが、傍はB9「病部」では解釈できない。筆者は𪗇²zi「悉く」の冠の「二」と「その下部を省略した形」の合成からこの傍が形成されたものと推測する。つまり𪗇²lyu「都案」は、𪗇²lyuの音符と「悉く」を表わす意符から成る形声字(「悉く」を司る官職=都案)である。筆者はB10を暫定的に「悉部」とする。

B11

B11は傍の位置に2例のみ確認できる。B9の縦線部中央に横線が付加された形である。下に原文とともに示す。斜め払いは横線から突き出ている。

(79) 2902 𪗇𪗇 𪗇 36B76 𪗇 37B35 泣く コーヒ、

(80) 4593 𪗇𪗇 𪗇 30B56 𪗇 31B16 泣く コーヒ、

紛らわしい字形は傍の位置に確認できない。

B11はB9で述べた𪗇²dzi:q「泣く」との強い相関が認められる。𪗇の右上に位置するのは「水傍」である。この部分が省略され、なお、横線で示された(つまり𪗇全体が一種の可変部首)と推定すると、字形の成り立ちが説明できる。B11ではなく、「𪗇」を全体が文字要素と再解釈するのが適切と考えられる。これをB11'として、筆者は「涙部」とする。

3.4. 点を持つ文字要素のまとめ

暫定的なものも含め、本考察で明らかになった、各文字要素の機能を示す。

表6 A類の機能と部首名(暫定的なものも含む)

タイプ	A1	A2	A3	A4	A5	A6	A7	A8
形	𪗇	𪗇	𪗇	𪗇	𪗇	𪗇	𪗇	𪗇
機能	意符	意符	音符	音符	意符	意符	意符	意符
部名	扌部	土部	hya部	da部	依部	黒部	担部	過部

表7 B類の機能と部首名(暫定的なものも含む)

タイプ	B1	B2	B3	B4	B5	B6	B7	B8	B9	B10	B11'
形											
機能	意符	意符	意符	意符	意符	意符	意符	意符	意符	意符	意符
部名	糸部	頭部	明部	結部	触部	耀部	歌部	老部	病部	悉部	涙部

3.5. 点の機能とその変遷の仮説

西夏文字の「点」は「字形と字形」ではなく、「文字要素と文字要素」を区別する。おそらく文字要素のうち、判読・弁別の難しい要素部品の、特定の筆画を注意するために付された符号である³⁹。しかし西夏文字創製当初意図された筆画の区別はやはり難しかったと考えられ、西夏時代でも常に正しく書き分けが意識されていたとは言い切れない。

西夏文字創製当時の、造字原理を記した資料は見つかっていない。以下は本稿での調査結果に基づく推論である。例えば、西夏文字作成者は、もともと「ヒ」と「七」で2種の要素部品を区別しようとしたが、「七」の方が「払いが突き出る」ことを強調しようとして「点」を付した。しかし「払いが突き出る」という微細な弁別は、現代⁴⁰はおろか西夏時代にも区別が難しかった。一方「点の有無」は明瞭である。このため、この2つは「払いが突き出る」は頓着されず、「点の有無」で区別されると錯誤されたと思われる。

要素部品弁別の変遷の仮説: 「ヒ vs 七」⇒「ヒ vs 七、」⇒「ヒ vs ヒ、」

³⁹ 本稿では悉皆調査した文献は限定的となったものの、他の西夏文字文献にも明瞭な弁別が確認できる。例えば筆者がかつて扱った仏典の「活字」刊本においても「点があるものは払いが突き出る」「点が無いものはそうではない」ことが見て取れる。

華嚴經 77 卷, 28 折目 3 行目 11 文字目 同 1 文字目 (荒川 2011: 291)

また西夏法典中には本稿(78)で扱った官名「都案」が、刊本・写本(草書)に登場する(この二つが同一箇所であることについては佐藤 2016: 104 の対比を参照)。前者は若干、点が不鮮明ではあるものの、払いが突き出ていること、後者は著しく字形を崩した草書でありながら、「払いが突き出ている」ことを意識した字形となっていることが確認できる。比較のため、この文字の3文字前にある「点が無い=払いが突き出ない」例(宵「諸」)も挙げる。

『黒水』 8: 174 下 1 行目 6 文字目, 『黒水』 9: 23 下 12 行目 2 文字目
 『黒水』 8: 174 下 1 行目 3 文字目, 『黒水』 9: 23 下 11 行目 20 文字目

⁴⁰ 現代における、日中の西夏文字筆画の錯誤は羅(1935)の影響が大きいと思われる。本書は旧版『同音』を书写、石印印刷したもので、西夏文字研究初期に貢献した資料である。日本では西田の諸研究を経て今昔文字鏡フォントに、中国では李(1985)を経て李編(1997)以降の『夏漢字典』に、その文字分析が踏襲されている。ただし現在の研究から見ると、再検討が必要な字形が多い。例えば次の字形は、偏も旁も見直しが必要であろう。

羅 1935: 29 葉目右頁 (29B17) cf. A2 の図版 (29B17, 30A55)

4. 結論と今後の課題

本考察では西夏文字の点の出現環境と機能を検討した。

対象となる「点」の範囲を定めた上で、点を持つ文字を全て調査した。その結果、西夏文字の点は字形そのものではなく、要素部品に付加され文字要素を構成するものであることがわかった。さらにその要素部品は、A類（くノのような部分がある）とB類（ヒのような部分がある）に限定される。そしてA、B類ともに、字形の近似する要素部品が存在する。

A類については、「くノ型であっても点が付加されない」例も若干あるものの、「(形の似る)ノメ型に点が付加される」例は無いことから、点とくノ型の強い相関は認められる。

B類については、一見「ヒ」のように見える部品を持つ文字要素のうち、「ヒのように斜め払いが縦線から突き出る場合は点が付く」、一方「ヒのように斜め払いが縦線から突き出ない場合は点が付かない」。

言い換えれば、西夏文字の「点」の機能は、字形の近似する部首の違いを際立たせる「強調符号」だったと考えられる。より具体的には、ノメ型とくノ型の区別、あるいはヒ型とヒ型の区別、を強調する機能があると推定する。西夏文字の考案者は、非常に微細なレベルで異なる字形を作り、加えて差異を強調する方策を考えていたのかもしれない。ただし例えば「ヒ」と「ヒ」は、当時の西夏文字使用者にとっても現在の研究者にとっても区別が難しく、弁別要素が「点だけ」と認識してしまうことがあったのは想像に難くない。

本考察から、西夏文字は文字要素のレベルで「Xの部分があればYの部分がある」という、いわば字形上の「係り結び」とでもいうべき現象が確認できた。今回は「点」を中心としたため扱わなかったものの、例えば「夏」においては初画の横線とくノ型が共起するという現象がある。こうした事例も今後の課題としたい。

本考察では、従来の文字の筆画・画数に関しても、いくつか疑義を呈することになった。西夏文字の字形・筆画については、既存のフォントや現行の字典・索引にも全幅の信頼を置けるとは言えない。今後もし細に字形を実見調査していく必要がある。

参考文献

- 荒川慎太郎 (2011) 「プリンストン大学所蔵西夏文華嚴經卷七十七訳注」『アジア・アフリカ言語文化研究』81: 147-305.
- 荒川慎太郎 (2014) 『西夏文金剛經の研究』京都：松香堂.
- 荒川慎太郎 (2018) 「西夏文字における、いくつかの左下要素の筆画について」『日本語学会第157回大会予稿集』442-447.
- 荒川慎太郎 (2022a) 「西夏文字の「部首」と造字法」日本漢字学会 (編) 『漢字系文字の世界—字体と造字法』90-108. 東京：花鳥社.
- 荒川慎太郎 (2022b) 「西夏文字の「底部右端が跳ね上がる繞」について」『日本漢字学会報』4: 19-36.
- 俄羅斯科學院東方研究所聖彼得堡分所・中國社會科學院民族研究所・上海古籍出版社編 (1997,

- 1998, 1999) 『俄羅斯科學院東方研究所聖彼得堡分所藏黑水城文獻』 7, 8, 9, 上海: 上海古籍出版社. {各卷主編: 史金波・Кычанов, Евгений. И.}
- Gong Hwang-cherng (龔煌城) (2003) Tangut. In: Graham Thurgood and Randy J. LaPolla (eds.) *The Sino-Tibetan languages*, 602–620, London: Routledge. [2020, 2nd edition]
- 韓小忙編著 (2021) 『西夏文詞典 (世俗文獻部分)』 (全9卷), 北京: 中国社会科学出版社.
- Jerry (2022) 古今文字集成 <http://www.ccamc.co/index.php> [2022年8月アクセス]
- 賈常業 (2017) 「西夏文字佚失字形結構的復原 (一)」 『西夏文字提要』 30–43. 蘭州: 甘肅文化出版社.
- Кычанов, Евгений. И. (составитель), Аракава Синтаро. (со-составитель) (2006) *Словарь тангутского (Си Ся) языка: Тангутско-русско-англо-китайский словарь*, Kyoto: Faculty of Letters, Kyoto University.
- 李範文 (1985) 『同音研究』 銀川: 寧夏人民出版社.
- 李範文編 (1997) 『夏漢字典』 北京: 中国社会科学出版社 (增補修正本 2008, 簡明版 2013).
- 羅福成 (1915) 『西夏國書類編』 京都: 東山學社 (油印本).
- 羅福成 (劉楚人) (1935) 『西夏國書字典音同』 旅順: 庫籍整理處.
- 西田龍雄 (1961) 「西夏語と西夏文字」 『中央アジア古代語文獻』 (『西域文化研究』 Vol. 4) 91–462. 京都: 西域文化研究会編.
- 西田龍雄 (1966) 『西夏語の研究—西夏語の再構成と西夏文字の解説』 II, 東京: 座右宝刊行會.
- 西田龍雄 (1984) 『漢字文明圏の思考地図—東アジア諸國は漢字をいかに採り入れ、変容させたか』 東京: PHP 研究所.
- 西田龍雄 (1989) 「西夏語」 亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編著) 『言語学大辞典 第2巻』 408–429. 東京: 三省堂. {西田 2012 に修訂再録}
- 西田龍雄 (2001) 「西夏文字」 河野六郎・千野栄一・西田龍雄 (編著) 『言語学大辞典 別巻 世界文字辞典』 537–547. 東京: 三省堂.
- 西田龍雄 (2012) 「西夏語」 『西夏語研究新論』 465–512. 京都: 松香堂.
- 聶鴻音 (2021) 『西夏文字和語言研究導論』 上海: 上海古籍出版社.
- 落合淳思 (2019) 『漢字字形史小字典』 東京: 東方書店.
- 佐藤貴保 (2016) 「西夏文草書体官文書の解説に向けて—法令集を用いた崩し字用例の収集と分析—」 研究成果報告書 (科学研究費補助金 挑戦的萌芽研究 研究代表者: 荒川慎太郎) 『ロシア所蔵資料の実見調査に基づく西夏文字草書体の体系的な研究』 94–110.
- 史金波 (2002) 「簡介英國藏西夏文獻」 『國家圖書館學刊』 2002 增刊, 113–122.
- Софронов, Михаил. В. (1968) *Грамматика тангутского языка*. 2 кн. Москва: Наука.

執筆連絡先:

e-mail: arakawa@aa.tufs.ac.jp

[受領日 2022年9月1日

最終原稿受理日 2023年4月5日]

Abstract

**On the Environment in which a “Dot” Appears
in Tangut Characters and on its Function**

SHINTARO ARAKAWA

*Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa,
Tokyo University of Foreign Studies*

In this paper, we consider where and for what purpose the “dots” of Tangut characters are added. After describing the structure and strokes of Tangut characters, together with the relevant terminology, we define the Tangut “dots” in question. The author investigates the original texts of Tangut characters with dots by checking the original shapes in the Tangut dictionary “Tongyin,” which exhaustively lists all the Tangut characters. As a result, it was found that the “dots” of the Tangut characters were attached to the right of the element and constituted the “part,” not the whole character. When the environment of the appearance of dots was scrutinized, it was found that the component parts to which dots were attached could be divided into two parts: Class A: a “<ノ”-type and Class B: a “ㄣ”-type. Both classes A and B have similar component parts (ノメ, ㄣ). At the time of the creation of the Tangut characters, the dots functioned as an emphatic sign that distinguished the differences between similar parts (ノメ vs <ノ, ㄣ vs ㄣ), but the author surmises that later the mere presence or absence of dots was misidentified as a distinguishing element.